

5. 第3回全国中高一貫研究大会報告

2004年2月14日(土)

(1)開会行事

挨拶 教育発達科学研究科長 村上隆
学校長 代行 速水敏彦
副校長 丸山 豊

(2)講演(9:20~10:20 於豊田講堂)

①講演者 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室 田中正幸氏

②講演題 「中高一貫教育の現状と課題」

③講演内容の概要

1) 各都道府県における中高一貫教育の設置検討状況(平成15年11月現在) 平成16年度で6年目を迎える現在118校。既設校よりは成果の発信をしてほしい。連携型から併設型が増えて都市部での導入が検討。予想より早く5年目で100校を越えた。

全国500校が目標 成果 中高の交流
教職員の一体的な取り組みが不可欠
多様な中高一貫教育学校例 芦屋国際中等学校
国立大附属中学校と県立高等学校

2) 特色ある教育課程編成

①「初等中等教育における当面の教育課程および指導の充実・改善方策について」(平成15年10月7日 中央教育審議会答申) 外国人生との積極的な受け入れ

②学習指導要領の一部改正(平成15年12月26日)について

③中高一貫教育における教育課程の基準の特例(検討状況)について 特例の活用 拡充を検討 連携型にも適用 中高の関連教科の内容の一部相互乗り入れ 前倒し可能 国会の付帯決議の趣旨を踏まえた有効活用を過重負担への配慮。3月改正 4月1日より施行に向けて パブリックコメント実施中。進路実現 高大連携 全国455校 単位化184校

3) 今後の課題等

①開かれた学校づくり(評価と公開) リーフレットなどの工夫あり。情報の発信(分かりやすく具体的) 説明会(小学校 児童先生へ) 自己点検評価。六年間の学校生活における相談体制も充実する必要あり。中高一貫教育の評価は長い目で 進路希望の実現 満足度など

②進路指導の充実。インターンシップ 高大連携

③入学者の選考の工夫 適性検査のねらいを明確に

④6年間を見通した特色ある教育課程の編成

⑤国における諸施策 中高一貫改善事業の見直しと一本化。中高一貫制度の評価を実施(16・17年度に幅広いアンケート調査(生徒・保護者・先生)の実施) 高校への補助金(継続) 加配について

(3)シンポジウム「中・高一貫教育を考える」

①シンポジウムI「中高一貫教育の成果と課題」(於 豊田講堂)

司会 本校副校長 矢木修

コーディネーター

東京大学教育学部附属中等教育学校 副校長 草川剛人氏

パネリスト 奈良女子大学文学部附属中等教育学校 吉田信也氏

テーマ「中等教育学校カリキュラムの開発とその評価」

1999年~2001年の研究開発学校として開発した、中等教育学校6年一貫カリキュラムの概要と、そのカリキュラムの検証・評価(2002年~2004年の研究開発学校)について

成果 カリキュラムの開発にある(生徒・組織) 2-2-2制 教科 総合学習 ガイダンス機能 カリキュラム開発(システム 独立評価者 授業観察)

パネリスト 高知県立中村中学校 併設型中学校・高等学校 教頭 谷 範浩氏

テーマ「本校におけるキャリアプランと中高の交流」 「学ぶ意欲」を育成する為のキャリアプラン。プレゼンテーション能力の育成とピア・チューターによる中高の交流について

成果 学校全体が優しくなった。(中高の交流) 学校長1名 教頭5名 キャリアプラン プレゼンテーション能力 2-1-1-2制 体験・経験の不足 学校農園 耕運機購入 インターンシップ(中) 韓国研修旅行(高) シラバス学習 デイバート 著名人の講演会など ピア・チューター(勉強を通じての中学生高校生との交流 高校生が中学生を教える 月2回 新たな発見や出会いと自己変化 社会性を身につける)

パネリスト 山口県立安下庄高校 連携型中学校・高等学校 校長 黒田 洋氏

テーマ「連携型の成果と課題-橋・東和地域(山口県)について-

橋・東和地域中高一貫教育の取り組み3本柱の一つ「学力の充実をめざす教育システム」について、具体的な取り組み内容から、生徒、教職員、保護者、地域の声を基に、その成果と課題を検証する。

成果 生徒・教員ともに中・高がお互いに分かり合えた 中高一貫の生徒の評価は上級生になるほど高くなる 本年10月に4町合併 東和町は高齢化率日本一 福祉施設の充実 地域・同窓生の支援 スクールバス3台寄

付(部活・学校行事・通学)生徒の多様化 ハワイカウアイ島修学旅行(高2) 生徒の夢の実現

A 学力充実(中高一貫の教育課程 基礎力 教室があたなくなる中高交流授業 個人カルテ 教科別分析表 年度末学力診断テスト 指導方法の工夫改善 中高合同の検討会 意識的に中高の協調関係を作る)

B テーマ学習(郷土学習おおしま)

C 体験的学習(ふれあい)

〈会場よりの質問〉(安下庄高校 黒田先生へ)

小・中・高の目標・ベクトルがずれている現実がある。学力保障として個人カルテ(中)の高校での活用について 入口と出口とプロセスの問題でもある。(短期・中期・長期)

⇒高校のものは今、検討中 高校1年までのものを作成中

〈質疑応答〉

Q 中高一貫校の立ち上げ時の苦勞と克服方法について(中高一貫の生活指導面への教員の心配に対して)

A 黒田先生

地域(との連携)を味方にする(同窓会や支援組織「安高を考える会」町の行事への参加) 中高の教員間の協調関係をつくる。中高一貫を優先するという意識

A 谷先生

中高の交流は異文化の交流(分掌組織で動く高校と学年団組織で動く中学) 教員のストレス 高校生が中学生に優しくした。心のケア(不登校)はスクールカウンセラーを配置

A 吉田先生

全教員が中と高を担当する。六年間一貫教育は教師(仲良くなること)から始まる。

Q 中高一貫教育をすすめていく上での課題について

A 黒田先生

学力(教科)の充実(生徒・保護者)システム 自主学習の習慣化(中3) 保護者との連携必要 高校のさらなる魅力づくり 進路(出口)保障の実績 情報発信 広報活動の必要性(生徒によるハワイホームステイ感動体験を中学生へきちんと伝える 千葉大学飛び級入学生あり) 小中高の連携を深める

A 谷先生

キャリアプラン実施で先生の多忙感あり 学校評価における検証 作文と面接で入学 進級問題 学力をどうつけるか 高校進学時に他校へ抜ける生徒がでるのでは。

A 吉田先生

生徒にとってのカリキュラム評価 独立評価者(多元的視点) 記述は強いがドリル不足(数学) 教育内容の

精選 カリキュラム評価方法研究 中だるみ(自宅学習時間少) 対策 A O入試に本当に強い生徒

A 矢木先生

「中だるみ」を青年前期の成長する時期としてとらえる

Q 最後に、シンポジウムに参加しての感想について

A 黒田先生

4月に下関に中等学校が開設して、山口県では三つのタイプがそろうことになる。その各タイプの三校で切磋琢磨していい教育の場を作りたい。今回の協議会は示唆に富んだ有意義なものだった。

A 谷先生

高知では連携型を3地域で併設型も3校同時立ち上げて、中高一貫に全国に先駆けて取り組む。今回参加して、多くの方が取り組んでいられることを知り心強く感じた。

A 吉田先生

国立大学附属学校として「中高一貫カリキュラム」の開発が本校の使命だと感じた。「生徒のためによりカリキュラム」か、を忘れずに開発していきたい。

〈終わりの言葉〉コーディネーター 草川剛人氏

昨日の「キャリアを語る座談会」で、生徒から名大教育学部附属学校の「総合人間科」では生き方を考えさせてくれると聞いた。また、その時の先生の役割を聞いたら「生徒のテーマにとことん付き合ってくれる」と言った。今後、全国で中高一貫教育の試みが進んでいくが、中高一貫でなくとも中学と高校の先生が連絡を取ることが日本の教育状況をよくすることになる。

②シンポジウムⅡ「六年一貫の学校(カリキュラム)づくりに向けて」(於シンポジオン)

司会 本校教諭 斉藤真子

コーディネーター 名古屋大学教育発達科学研究科教授 速水敏彦氏

パネリスト 白鷗高校開設準備室 都立中高一貫校

教頭 増田 稔氏

テーマ 「東京都立学校初の中高一貫6年制学校開校に向けて」

東京都立高校改革の概要と東京都立台東地区中高一貫6年制学校(仮称)の平成17年度開校に向けた準備について(パンフ参照 東京都のHPにある)

都立の10校を中高一貫校へ。200校のうち50校を改編する予定で高校改革の一貫。都立大学附属高校が18年度に先送りされたので都立白鷗高校が最初になった。10校とも進学重点校。私学へ対抗するために 教育目標はパンフレット参照。組織は分けない。1年生4クラス160名の募集 特別枠16名(1割) 卓越した能力(英検2級)を

もった特殊な生徒 日本伝統文化(囲碁将棋) 将来プロ
(推進委員会で検討中) ホームページを参考に。二学期
制 45分7時間授業

特色ある教科 中高の枠を越えた授業 特例の活用
教科の相互乗り入れ

課題は 時間数の義務教育と単位制の高校 教員の行
き来が困難 中学籍と高校籍 給与表 講師の配置の基
準 中高の教員の意識の違い

パネリスト 名古屋大学教育学部附属中学校・高等学
校 副校長 丸山 豊氏

テーマ 「中高一貫教育における生活指導の在り方と
学校運営」(レジュメ参照)

中高一貫の学校運営は一体型が望ましい。大切に
してほしい点は「自治の力」をどう育てるか。自治能力と
文化活動を分ける 中3が一番問題である。(高校生が
やってしまう) 特別活動でしっかりと区別することが
大切(中学校の文化行事 演劇コンクール・合唱祭への
積極的な取り組みなど 中3がしっかりと完成したもの
を示す 生徒の手で文化をつくること 担任の支え)
体育祭やスキー合宿は中高一緒 6年間で育てる視点が
必要(生徒をみていく自治の力) 課題は併設型では高校
一年生。内部生と高校で入学した生徒との交流。カリ
キュラムの問題だけではなく学級経営や学年経営も大
事。また外からリーダーシップのある生徒と内部生が切
磋琢磨することによる活性化を図って中3と高1を埋没
させないこと

パネリスト 早稲田大学教育学部教授 安彦忠彦氏
テーマ 「中高一貫カリキュラムの今後の在り方」(レ
ジュメ参照)

コンセプトは中と高ではなく「中等教育の前期と後期」
個性と自立への対応 連続面と非連続面を考える。両
面必要 中等教育全体のカリキュラムを構想する。現在
よいモデルはない。カリキュラムについては法律上の
これまでの押さえ方を吟味する。

中高一貫カリキュラムをつくるためには「中等教育」
の「前期」と「後期」という大枠の基本的性格を押さえ
なければならない。学校づくりの中核はカリキュラム。
これでいいのかの中味を吟味してほしい。

①教養教育 後期には生徒は教養(絶対的な概念 究
極的なもの 死 永遠 有限 無限 命 哲学)という
概念にぶつかる。教師が自覚してほしい ②義務教育と
そうでない教育 運用上単位制の考えを中学におろせな
いかと考えている。自治の力を育てること ③地域の
特色は必要しかし特色性ばかりをだすと他者がはいれな
い。一般性のある地域の特色(国際化)で ④キャリア
教育 生涯教育の視点をいれる ⑤高等教育との連携
大学との連携 こどもが将来像を描ける

〈質疑応答〉

会場よりの質問 (増田先生へ)

Q適性検査の具体例(HPに具体例あり)について

A 増田先生

検討委員会(都)より出される 各教科にまたがる
答えは一つではない

Q人事異動 一貫校のスタッフはどのようにそろえる
のか

A 増田先生

都の研修センターで「もし中高一貫校の教員なら」と
いう研修あり。それを受けてもらってから来る。

Q適性検査はだれがつくるのか

A 増田先生

自校で作成。ただし教育委員会からの指導主事が作る

会場よりの質問 (丸山先生へ)

Q高校生からの刺激 自治の力を育てる行事以外の取
り組みは 資料があれば紹介してほしい。

A 丸山先生

生徒部を中高一貫で指導している。中高の制服検討委
員会を設置して話し合いをしている。

Q併設型が出来て一年になる。中高の教員の生活指
導・授業に対する温度差があるように思うがどうか。

A 丸山先生

本校は給与面ではすべて同じ「併任」という形
時間割 教科会も一本化 得手・不得手はあるが学年
経営で補う。意識の壁を取り払うことが何より大切

A 安彦先生

職員室は同じ 一箇所に集まることで意識の壁を取り
払う

フロアより

行政は中学校と高校を分けて指導する。我々がいくら
壁を取り払おうとしても これがネック。

会場よりの質問 (安彦先生へ)

Q中等教育の前期でつくって(完成)おこななければな
らない力は何か。守って(独自の文化)おこななければな
らないものは何か。

A 安彦先生

中学校は完成教育の場 中学生が教育のゆがみを最も
受けている。大人は中学生の心の闇を理解できているか。

解決の一つが学校制度にないか。入試を取り除くとい
うことで中高一貫に賛成。6・3制を変える時期。今の
こどもに合っていない。小・中・高全体の仕組みを変え
る。中学校の位置づけを自立の面からみる。自立を育て
きる。社会科は暗記科目ではない。自立を先延ばしして
いる。自立という観点で技家を考えよ。

高校は「観」の形成ができる。中学校は自分を探す時
期。さぐりを入れる時期 試行錯誤 高校生がいること

に意味がある。中途半端でも独自の文化ができる。「観」の形成はまだできない。認めてやってほしい。いろんなものを受け入れる時期だということを

村上中等教育学校

(文責：斉藤真子)

Q中等教育学校でも生徒会は別別 自立のとらえ方が30代と50代の教員では違う。とらえ方が違う。議論がかみ合わない。その中で哲学に深めるにはどうすればよいか。

A安彦先生

哲学を考え始める中・高校生の方に先生方が正面から向き合ってあげてほしい。それならできる。身近に哲学意識がなくなっていることが問題。教員の共通意識を作ることから。

Q増田先生よりの質問 (安彦先生へ)

これから始まる学校づくりのシラバス・教育課程はできる。中高一貫では生徒は中学校から共通の経験をしてきている。高校段階での実践上の課題を丸山先生から学んだ。しかしそれらに縛られてしまうこともある。バランスが難しい。このあたりへのアドバイスをお願いします。

A安彦先生

高校での道徳教育の研究開発が増えてきている。理念性の育成 人格教育の理念は何か。人間性の育成も一貫校では一貫して担う。中～高へ 高～中へ どのように育てておいてほしいか、育ててほしいか お互いの意見をすり合わせる。こども(地域・背景)は違っている子が来るのが当然である。

〈終わりの言葉〉コーディネーター 速水敏彦氏

「中等教育」の概念(原点)を明確化してお互いに先生達が話し合い共有化することが大事である。

中高一貫だから、中学籍・高校籍を実質上取り外した形で“場”を持つことが大事だ。行政への働きかけも必要でこれからしてゆかなくてはならない。

(4)全国中高一貫教育研究会総会 (於 豊田講堂)

118校参加

総会次第

1. 全国中高一貫教育研究会代表挨拶
名古屋大学教育学部附属中・高等学校
校長代理 速水敏彦氏
2. 議長選出
奈良女子大学文学部附属中等教育学校
勝山元照氏
3. 議題
(1) 全国中高一貫教育研究会改則について
(2) 平成16年度役員及び役員校について
(3) 会費について
4. 第4回研究大会開催校の挨拶